(二) Ch. XIX, 002 は卷第二、分別界品第一之二の本頌「應善調伏心　心調能引樂」に對する長行より、同本頌「眼不下於身………意不定應知」に對する長行までに附したる釋の譯

(三) Ch. XIX, 001ª は、卷第四、分別根品第一之二の中に說きたる相應の義に附したる釋の譯（?）

(四) Ch. XIX, 001ᵇ は卷第十八、分別業品第四之六中に說きたる四梵之福に附したる釋の譯

## 四　安慧と其の倶舍論の釋

今進んで本書の性質を解說する前に、先づ安慧とその倶舍論の釋といふものについて攷究して見なければならぬ。本書の Ch. XIX, 001 の卷頭に、前記の如く漢文で「阿毗達磨倶舍論實義疏卷第一」と記し、續いて之を回鶻語に譯出し、第四行の半から第五行にかけて「尊者悉地羅末提造唐言安惠」と記し、尊者に對しては ayaγ-γa täkimlig 卽ち「尊敬に當る人」、悉地羅末提造に對しては ästiramati baχšï yaratmïš ärür 卽ち「Sthiramati 師作りたるものなり」唐言安惠に對しては ästiramati tigüči sav-nïng (ïγ) tavγač časïnča yörä sözläsär (läyür) ornaγ-lïγ (安惠tip) bilgä biliglig tip yörüg önär (ol) 卽ち「Sthiramati といふ言葉の（傍訂、を）唐言にて釋きて言はゞ（傍訂、釋きて安惠といふ）安定なる智慧といふ義出づ（傍訂、之なり）」と譯してある。それで此の本は唐に安惠というた尊者悉地羅末提卽ち Sthiramati の作つた阿毘達磨倶舍論實義疏といふものを、漢文から回鶻文に譯したものであることは一見して明かである。安慧―安惠が Sthiramati といふ語に應ずるものであることは誰も疑はない所で、慈恩の成唯識論述記卷一に十論師を擧げ、その第三に「梵云悉耻羅末底、唐言安慧」とも見えて居る。悉耻羅末底と悉